



森
氏
陽
復
原
中
書
畫
共
計
大
字
三
冊
五
冊
共
計
八
冊

73
1757



門ノ3
號 1757
巻

あうり玉と名あ民地あんまろ道ハ仁より中

ふ武門貴族のあませりしとて女家の

事序より列を且せ貨津瀬よとて文字に晴く

何の女とあうり中幕中府権候の才とあう

世を海く蒙るくくくくくくくくくくくくくく

交後くく落屏れ重穢ふゆり熟思惟をり

ふ天下への忠誠を流くく名程の事とと報せん

事、必を信りあり信民を接育り子孫を

て不候をくくくくくくくくくくくくくくくく



意此等々憐れ心と夫ら^が万幸一康直又あつらん^が
とあつらん^がと^は其^れ又^は然^るや^はあ^らず^はけ^んけ^ん馬^は此^の
やあ^らず^は満^ち信^に不^附く^も思^ふ家^の不^意を^驚く
人^はよ^しと^しり^りあ^らず^は遂^に行^はぬ^をと^は物^は云^ひ物^は此^の
あ^らず^は心^に不^下わ^らぬ^一波^に有^んこ^とを^歎か^らず

たれん云

享保十六年 辛未 年 三月中浣

参議尾陽信源宗春書

一丈人^のち^らる^る平^平心^心執^執中^中取^取て^て計^計ら^らず^ず
志^しら^らず^ずあ^らず^ず意^意を^を急^急り^り願^願す^す一^一之^之字^字は
中^中より^{より}取^取り^りあ^あら^らず^ず一^一丈^丈者^者あ^あら^らず^ず取^取ら^らず^ず
者^者ま^まく^くま^ます^す行^行儀^儀と^として^{して}あ^あら^らず^ずあ^あら^らず^ず
故^故に^に意^意と^と思^思は^はれ^れ之^之字^字を^を掛^掛か^か二^二幅^幅ふ^ふら^ら意^意は
字^字の上^上に^に目^目は^は丸^丸と^と公^公せ^せた^たら^ら意^意は^は心^心に^に中^中よ^よの^の
隙^隙を^を其^其鈴^鈴と^とい^いふ^ふ一^一外^外あ^あら^らず^ず取^取ら^らず^ず
へ^へと^と及^及び^び淵^淵と^とい^いふ^ふ照^照と^とい^いふ^ふ心^心を^を大^大陽^陽に^に
使^使と^とい^いふ^ふて^て此^此と^とあ^あら^らず^ず思^思は^はれ^れ字^字の上^上に^に月^月乃^乃

丸とさせきり堪忍心持中にまておくと
それら~~の~~大徳の形をききり日月の
二字と合せし別内此字あり大徳の明徳
にそつたるさうりゆるめくくおれくしてこれ
まふこのこまて空しくおれおつたを
日進まの~~一~~篤興道其此者の衣袂小仁は字を
おるに中付きり是の内小居ては是の二字
とん外おては仁は字をん物々向ち小おては
と忌まはして執りおとす一はこれまに

一和漢お今より武勇を深さ万人小孫也一
名お其教限る一けり小功業は小徳統せん
して威い失せ子孫二代はけかろひ是仁心
なく松教さうんかして自分の榮耀者を極ち
人氏との^{其日}おえらておる一はあり

東照宮は日月寛仁の神徳備へて流い下
まその神意照はくは歌くおらる一老き人心を
改め帰くおれし五の罪を清めり一老き仁義
れたりよははれを^忘とせ給ふこの明君か

清くせらまうしは子孫枝をまことし其清徳
行ふにけはけはまらまらまらまらまらまらまら
音もよし掃りにして天下に政務をまら
執行をまらまらまらまらまらまらまら
ある四方の陽いこのい女をく保くは法
と守りては仁政小根一華くら目も及清世能
ふ事なり仁者も歌なりとこの古人の清を
と極れいとまらまらまら

一國政の申に百一おまらまらまらまらまら

忽改めまらまらまらまらまらまら
事只刑罷の老に一旦あまらまらまら
か悔てもれく一のあまらまらまら
上の痛と念と又大事ふかまらまら
たると子百人れ中ふまら
刑してして天理も習さまらまら
不孝不儀弄人を教せまらまら
又まらまらまらまらまら
罪科おまらまらまらまら

人ふしありてはそこありぬる病れ又まへ
勿論ねん ~~れ~~ 世ににまうとくともあきら
却りまへへ平生定うおしきり
若れねまひと見ひし理ふたふ無極よれ極子
るこ中ありたふの好悪微塵にてし ^さ 散
そは貞の極え語よ述らまぬありと
一世の極子はくく考へんんに行事にし ^し 用ひら
るるに者未志とけうら初れ極れ我私事と
執行の義よを ^せ 成るの上のはため下れためよ

百事常ら決つてはつてんせんと心お思ひに
みし云ありてとこまふかせしとて職
ふありて吾者ふの心と父ふたふ始らぬい ^し 浅
人とおと ^き ちり ^り の ^り ね ^く 返 ^{して} あり ^て 此 ^は 同 ^事 以 ^て 害
ふあり事とると思へまらぬやある事 ^や 其 ^を 造
私教昇 ^中 候 ^に 心 ^が 思 ^ふ 事 ^は あり ^ま 又 ^は 同 ^く
上たる若し始れ ^に 申 ^は 其 ^の 状 ^は 世 ^に 久 ^く 賢 ^者 表 ^す
し ^留 へ ^ら げ ^ん 候 ^に 格 ^を 惟 ^と 行 ^へ 候 ^に 後 ^に 其 ^を 考 ^へ
と ^返 顧 ^心 候 ^に 政 ^務 と ^な る ^に 其 ^を ^と 考 ^へ 候 ^に 其 ^を

此れを幸あり秦に嫁して天下統一
此の威光盛なりと云ふ事と後漢書に
物さく後ふも愚昧と極よめて長生
と我の極よなりと云ふ事と後漢書に
外漢武帝唐のま京杯は信方と後漢書に
お通せしと云ふ事と後漢書に
あつたる仲ふむと云ふ事と後漢書に
る事と云ふ事と後漢書に
あつたる事と云ふ事と後漢書に

一書に云ふ事と云ふ事と後漢書に
つて云ふ事と云ふ事と後漢書に
彼一古くは事と云ふ事と後漢書に
廣くせん事と云ふ事と後漢書に
教習事と云ふ事と後漢書に
人を渡す事と云ふ事と後漢書に
あつたる事と云ふ事と後漢書に
後漢書に云ふ事と云ふ事と後漢書に
あつたる事と云ふ事と後漢書に
あつたる事と云ふ事と後漢書に

時よむりいふ暇か決めしかあゝいふらう歌人の吟味
あういふらうと自家有家のよしふいふて其
老役ふたゝら座に永遠一生捨り老の節ふ
行事一母有事一母て甚殘念あら事あり
お公おまたゝ外の役ようつゝ一用いふ人さ
てかり何役ふ用いて一宜ういふらめふ法も
老の不女たう役めふ知るゝ事か其仲一ふ
律儀一痛決老いゝ福くは徳有只倍共れ七
けらのあゝいふらういふらういふらういふらう

隠一たう老い人をや換ひふは害にあら事一
一也一て人あは好い娘いの有とのあり立振食
お成娘あおとこいそれくはらうとのし御れを
我好事一人あは好まを家娘いあるゝ人あは
娘をそ娘よ仕あもい甚せまといのりあて人状
上なる老別か何うよ一いふらういふらう
事一ああらういふ心よりあらるゝあ百人ありて
しかういふらういふらういふらういふらう
そ人い娘一かたう一あはよかあ一いふらう

ありての言一々道なき人一々の
のいたるはしりては一古人は如の
ましはけりまらりて

一百姓法度号入今年に多くありまはひれの
つゝ皆去りて又あるも来りて法令厳く
一さしりて小女をとりて其の子を救す年を
治るゝの後おのころをみせて皆さるゝと
ありては十キありては一の母をな一其外一切
此法法後所のれ扱とて其意をまはりて

くは、東條のりてをまはりて行んて中一法
令多きまはりてのりてをまはりて一法
ありては跡先とてその法ありては懐れとて
くゝ一自らとて法儀のいひてはありて一
このりては一とてはありてはとて考へ人の
程も多きとてはありては一法神をりては
止りてはとてはありては一百姓法をりては
勤りてはとてはありては一法をりては
皆く去りてはとてはありては

くげにたしをむねにけりるさう和漢といふ
事一の事しなくは友の繁にさうからぬと
わしこきあつよ

一 倭物に織の家と信々の根不ぬまはむお勤へ
こしりさう第一國に月新にみ足して、あつり
手あふあつりこして國をのち極とさる去なり
心理ふたふいてちつひよかんつあつりさうこつひ
慈悲のすこもくあつてさんもあつてむじこ果仁
なりは方おまて法人甚痛く甚一こ首眼あつ

二 蓋の費より方山海は自生と生一田畑は時
極に外職人のよりそ極うお限さう一かあて極
この價あつり金う一教を掉をいしは保るこまを
こしあつりこもく養あよあつて一友極二年三年と
月いらつりこ一お一年の月よま交しは智の極ハ
あつらぬよあつり積りくしては夫なり費あつり
毎こまなりなりさあられはとて味をくこ極ハ
極分考りけり一はさう考なり極よ心を月ハ
人の蓋よりあつらぬ養をさうがふこつ二つあつ

曰一事をきくは能くもすは判れは
よらうて色くはやたらしものしちのし中
下と和熟一致ふれくしては吾行しを遂
くしてははるあり

「昔も今も人のまゝして文の氣血を
さしてはさうのしからんあつた人し平は
及たる老い老人といひ單又十代此老い老人といひ
まこととしおね申をり物うは道東此
十代せくらう十ふしあたらあは單一とらんりふ

多くは氣色にあとく氣根うましくはる者
も妻ふあまらう女食を喰られは後伴付は
あつたものめいもたまたりははははは
くうものいしくくはれあつたは是知
らうそたはれらうはな一はなて甲樂を
仕たる心おまふんをうかあはるま月れは
他はほやかうはれはあつて内心者も若く人
のんぬおめては還て礼行不養生をたを強
く整んよなりをうかあはとれはは事あり

農業と勤り共外情に世渡り此處に相らるる事
に肯新事と云ふにこれに心は中あらず
猪より長命は若しか来これく其の力健なり
けなくは能くして人勤て生きたるの意用は意用
愚鈍發的は是れ亦及らん此西く小我勤るる
るりく大切な意にまよはざるにせむなり
何れもそのま未なりとて思ふに一にせむなり
是の暇なりとて知らずはる猪ありはる猪あり
命あり若くはまよくはばくはるるなりはる
持振よららるるに云なり

一神社佛圖破損一兵道橋修葺後式は所
表徴一雜者より其の所共所の品ごと
店に味の上振まると其の物を修葺共其
めんをなると日と切て光輝一又神社を修
の諸の品より法人飢渴と凌くりるよおむの
茶店餅豆府の教養の場所とていふ一其の
事一短し短し短し下、此回ひみしめを
何時か此雜人のころはるは侍の之を改め

くさくさ礼行碎れみ余り人を換婦人下
病をよみよは病をばあし一誇働もなす
あまは其の荒ぶる乞乞汗きしむらひの如く
もなく息付けし一後をこぼ笑くあはれ指は
行るうと此からくおまよし事一礼心因の志
大切なり割掛を極へて苦ふれあはれ存在れ
の曲志はこふの極まを考へ息夜中付も若浪
よいこし一並いよし如世なまは後くおひひ
るこ自然とれいやうに信とこまうし一
よのあり其流授ふは次あくらと方来し一場不
ふく何れを後那集ししてし中かこし
おひまよしと上置きたつひ志なと方く常ハ
政道の一物かこしやし一らこし一信に二行一信
賜る席しあてしこふこしあはれしあはれし
くし一らこし一らこし一らこし一らこし一らこし
一何事ふよし一何事ふよし一何事ふよし一何事ふよし
事揚てかこし一こし一こし一こし一こし一こし
あはれし一らこし一らこし一らこし一らこし一らこし

くさくさ礼行碎れみ余り人を換婦人下
病をよみよは病をばあし一誇働もなす
あまは其の荒ぶる乞乞汗きしむらひの如く
もなく息付けし一後をこぼ笑くあはれ指は
行るうと此からくおまよし事一礼心因の志
大切なり割掛を極へて苦ふれあはれ存在れ
の曲志はこふの極まを考へ息夜中付も若浪
よいこし一並いよし如世なまは後くおひひ
るこ自然とれいやうに信とこまうし一
よのあり其流授ふは次あくらと方来し一場不
ふく何れを後那集ししてし中かこし
おひまよしと上置きたつひ志なと方く常ハ
政道の一物かこしやし一らこし一信に二行一信
賜る席しあてしこふこしあはれしあはれし
くし一らこし一らこし一らこし一らこし一らこし
一何事ふよし一何事ふよし一何事ふよし一何事ふよし
事揚てかこし一こし一こし一こし一こし一こし
あはれし一らこし一らこし一らこし一らこし一らこし

あて未練未熟のふ気決者をあつて
一上へり人の縁とやうに又親伯父はあつた
是のふをまうし明友のふあつてしつてあつた
かゝるを考へてあつたころしつてあつた
二年計しつてあつたころしつてあつた
ろくは物事とあつたころしつてあつた
何事をもしつてあつたころしつてあつた
しつてあつたころしつてあつた
是のふをまうし明友のふあつてしつてあつた

只料考へし如くはあつたころしつてあつた
計はたのふとあつたころしつてあつた
事しあつてあつたころしつてあつた
あつたころしつてあつた
とせしと思つたあつたころしつてあつた
あつたころしつてあつた
相を考へしあつたころしつてあつた
てのふあつたころしつてあつた
あつたころしつてあつた

をいふにねちかき事なり

一ふふりまある人をしてしるはちる者今も
ふふりまある人をしてしるはちる者今も

あつちのまう百のうをほる危(指)はつ

白端のまうを(指)はつ

ま(指)はつ

名(指)はつ

の(指)はつ

上(指)はつ

を(指)はつ

日(指)はつ

皆(指)はつ

あ(指)はつ

若(指)はつ

他(指)はつ

女(指)はつ

一(指)はつ

る合はれ此とくうのいさうせうまう
有略考一此竹節也(時合不自由時
そそあはる)む互にほほしく感ず
歴こころく高政をきくまて又人れ共いん
あり之人れ共いんそ彼を節くぬちり
そそ共中若凶又ハ大食れ折人の多く入
め外れ彼の志をいすこは彼是とまれ
大島ふるし合れにちりものこいさうの
ちられいさうそちりるいさういさう人救をく

あうそい何かと御てし中くまは他う也
其原をいさう百と折くまてし病人救
まうそ又ハ折月たれし他折出方志いあ
て存の介九人まうあうそそあハとあ
あうそい書をいさうあうそあうそあ
あうそいあはるそそあうそあうそあ
折まうのいさういさうのいさういさう
そそ折をいさういさういさういさう
心は固れしそそあうそあうそあうそあ

春に千束がーつてかどれしちる公其外のみ
 をりささき取れりしちるしちるしちるしちる
 衣旅かぬを始向よのくらまのいせ使れり
 あり齋の管仲の衣食はてれれれれれれ
 といひたふれれれれれれれれれれれれれれ
 をとすししししししししししししししし
 のかきししししししししししししししし
 ししししししししししししししししししし
 氏政の節はせししししししししししししし

とんあれまあてしししししししししししし
 一尺原よそ大た人よらんおとされれれれれれ
 矢とましとましとましとましとましとまし
 去なりししししししししししししししし
 知やしとましとましとましとましとまし
 是にえんれれれれれれれれれれれれれれ
 念しししししししししししししししししし
 一尺人よそ大た人よらんおとされれれれれ
 何れしししししししししししししししししし

我手方は此後と一ころいひり申す文武此の
衣を天下をたらし長久此基を元と給ふ
し是より命の長さくらと成り仕申せし
るに工農工商此おちりぬを念とすしは
老此より名人にたりしは力之を積る念
有るに今も世を治る志人此ためぬため利益
をとりしをいふは極る後人の公濟
無事しやなれども思ふにのちりし
命をかりしてつとを——熟をまじい福

福を信なく自然に凡俗に可算する
持場は後には世俗をくしてしは併れぬ
屋をさるし人此にさし難きを公の迷ふ政
公事は此の所信す日利に扱あるし食を
やうらうましくせらるぬは命をまじして
のこりて人のあはれき世をさす貴し
ありあはれ井の用は好くもりし志
物此を此を井に流し立集りしは
古例採考し是より命を腫之れて死

これ等いふまじき事——と方及いしる理なきく
所意他は竟したる上よは是未れたるいふ所
あるまじき事なり

一政を盡し事終るとして又たたふし
七おそれる事なり——たる事——しなごふまじ
おのれをせし——國法に悔をあらざる事なり
るりのまじき事なり——事自家人に
思道入分別してあまうまじき事なり流人此
等を執りい理化の若の依輔佐なり——

あつたりのまじき事なり——事ありき事ありき
無事をおとらるる事——この行いして知れし
一上をとりて——松を捨てたはけし事なり
物事ありしる事なり——事ありき事ありき
まじき事念ふ事——事ありき事ありき
くしき事なり——事ありき事ありき
救済の人をたはし事——事ありき事ありき
事ありき事ありき——事ありき事ありき
はしき事なり——事ありき事ありき

草男女の涙を皆に白くするに上れば
信をくして一方端心なたるにて力をひき
くつひに心をいへん事か自かくの
らくもせらるる少く是れ度いも但上の存念
いぢら内いづくは教斗あつたういといふ
解りぬる信にけがらなくと熱せし心
よりておれはあつたうとあつたう
ふいふ事をもを名をなすも且送報を
るよとれいそ全正更に取存めて云
語にまこと

いふはまゝいふ心持ありて唯く
熱練をく事
憐愍せしめていけさる存行の真
實天理の布をく事いふ
あゝもさる孫いふも右に心を
おれつゝ天地といふいふ
右に書を述べて其の條教を
せしむるに
具に我布をを
熱心後起

いけり政通此物よりきりん事を欲し
方とて救済を以て之と後に附する事也



慈心

忍心

